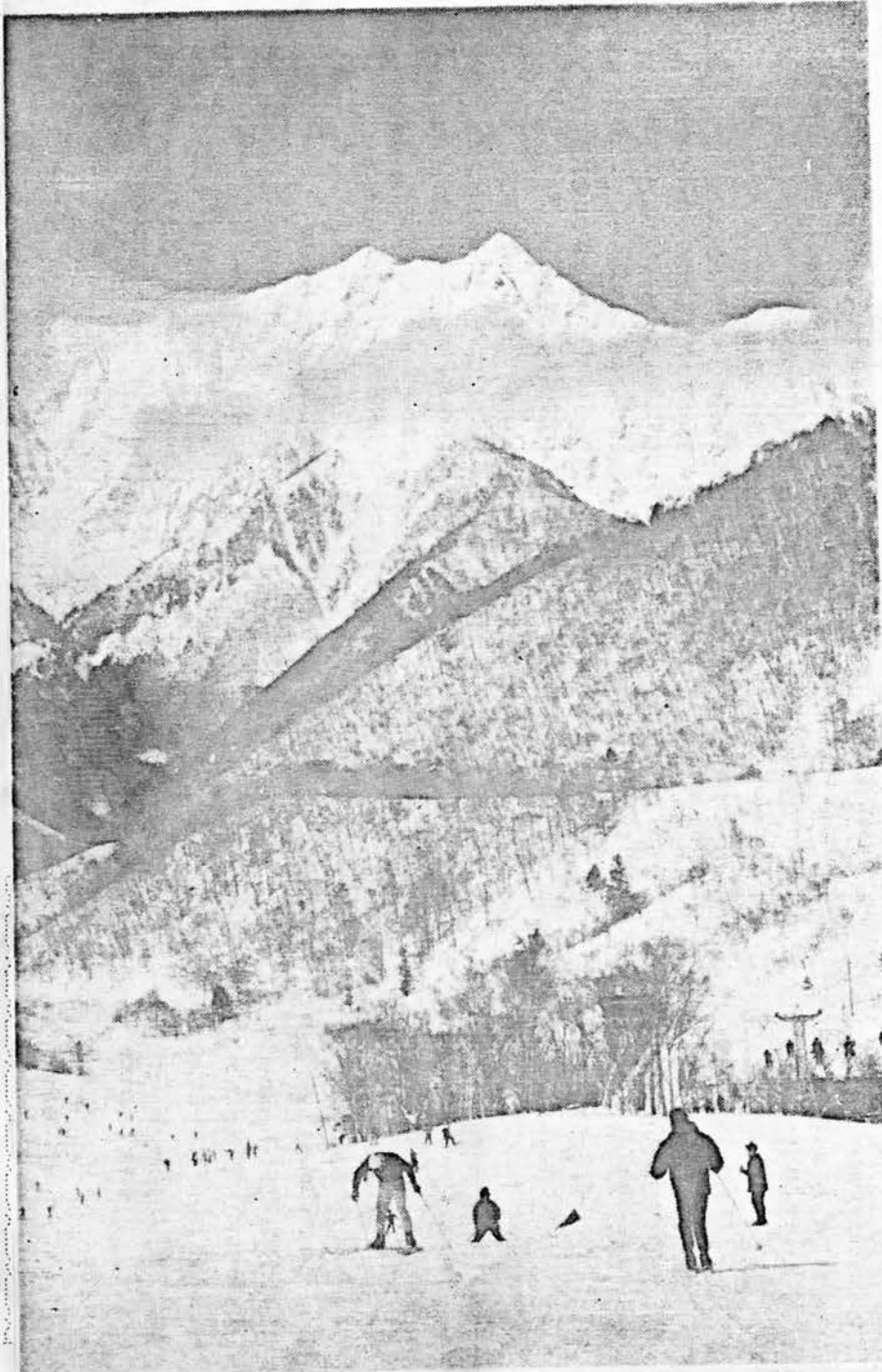


# 山と博物館

第9巻 第2号 1964年2月25日 大町山岳博物館



## 漬物の味

スキーブームで年ごとにスキーヤーの数が増して、どこかのゲレンデも原色の花が咲いたようである。それにともない「民宿」が陽の目を見てスキー場の麓は、「民宿ブーム」でカヤブキの家に増、改築したものが目立つ。そして「民宿」の最盛期は正月が頂点である。ドツとばかりに押し寄せたスキーヤーに家族は母家の片隅に追いやられ、目のまわるような忙しい正月をすこす。その忙しさにまぎれて忘れてしまったものがありはしないだろうか？

「元来「民宿」はゴッゴツした木綿の肌ざわりが訪れた人々に「いろ

りの火」のような暖たかさを与えてきた。昨今の民宿はホテルと見まがうものが現われるほどの発展ぶりだが……

「たまたま会った人に「比頃の民宿には「オハ漬の味」がなくなった」と云われた。なにも本当の漬物の味がなくなった訳ではない。「いろりの火」のあたたかみを感じられないと云うことだろうと思う。「オハ漬の味」は各家庭によって違うように「民宿」にも一つ一つ異なる持味があるものである。

インスタントはやりの世の中に、即席ではできない「オハ漬の味」は大切にしたいものである。

(千葉彬司)

# ひよこのあれこれ

海川庄 一

きよ年の夏、館の仕事として雷鳥の孵化と育雛に当った。特別天然記念物「雷鳥」を飼育増殖しようというのだから、身近かな家畜の人工孵化くらいは一通りやってみなくてはお話にならぬ。そういうわけで、私は二羽のメンドリを飼うと共に、自分で小型の孵卵機を買って込んで居間に据えつけた。

## アヒルは水浴びがきらい?

三羽のアヒルの雛が孵卵機から出て来た。孵出の途中で湿度が不足したのか羽毛に卵殻膜の一部がくっついてしまっていた。早速、産湯を使わせたが、これがめんどうな仕事、前に四十度以上もあるお湯に入れて雛をシヨック死させた経験があるので、こんどは温度計を使って三十八度とした。ところが、三羽目になると湯の温度も下ってくる。三十度そこそこの湯(水?)から出した最後の雛は育雛機の中でブルブルふるえていた。それから一ヶ月もして、成長のすごく早いアヒルのこと、すっかり大きくなった。家に池がない。仕方がないから、お天気の良い日は毎日タライに水を汲んで水浴をさせた。どういいうわけか最初の湯浴みでふるえていた雛だけは相変らず水に入らたがらない。タライへ入れて、しっかりと手で圧え逃げ出さないようにして体を洗ってやり、大急ぎでタオルでふいてやるという手数をかけさせられたものである。

## 雷鳥は鶏より寒がり屋?

孵卵機の中で雷鳥の雛が二羽生れた。全く同じ日にチャボの雛が五羽出て来た。当分、同じ育雛機の中で育てることにした。育雛機の中の温度は大事な雷鳥に合わせることにした

初生雛の適温はニワトリならわかっている。しかし、雷鳥のことは雷鳥に聞いてみなくてはわからない。そこで雷鳥にたずねてみた。このくらいではどうだネと。ところがどうだろう。快適ですと答へ、育雛機の温室内に散らばって静かに眠ったのはチャボであり二羽の雷鳥は温室の中央、一番暑いヒーターの真下に行って伸び上っているのである。そこで更に温度を上げると、ようやく温帯部から離れるのであった。これがもし一般的なこととなら、雷鳥は生れたばかりはニワトリより寒がり屋ということになるであろう。

## 親に似ぬ子は鬼子?

ゴールデンネックとコーチンのかげ合せとこういう真黒いメンドリを飼った。これに東天紅のくすれみないな雛を配したから変わったのが出て来た。親鳥に抱かせて孵化させた五羽のうち四羽までは母親似て孵った時から真黒である。あとの一羽がどちらかといえは父親似であるが、母親の黒さなどどこにもない褐色のヒヨコだった。ヒヨコが生れて三日目まではこのニワトリ一家は平和だった。ところが二メートルと離れていない別の鳥小屋の中で、褐色の名古屋種が白チャボの雛を五羽育てていた。そうして、二羽の母親がお互に子どもを連れて庭に散歩に出たからいけないお隣り同志のケンカとなり、親鳥は互につき合ひを行い、隣の子とまでもいじめるのである。その揚げ句、どういいう風の吹き廻しか黒い親鳥は自分の実の子である一羽の褐色雛の頭をつついて追放してしまった。親に似ぬ鬼子は育てぬという料けんである。ところが

よくしたもんだ。捨てる神あらば拾う神もあるお隣の母鳥、薄情な黒はあさんの子どもをいただいて、前か育てていたチャボの雛と一緒にし、しかも一番可愛がって育てたのである。

## 雷鳥を孵したナゴヤ

捨て子を育てた褐色のナゴヤは初めチャボの卵を五つあずかって抱いていた。十六日間あた、めた時、爺ヶ岳から特別天然記念物という大変な卵が下って来た。このうち二卵はナゴヤがあづからなければならぬ羽目になった。というのは、ちょうど山から下って来た雷鳥の卵は、ナゴヤが抱いていたチャボ卵と発育が一致していたからだ。ところが、あづかる雷鳥卵二つのうち一つはまがいもなく無精卵なのだ。それも、ナゴヤにしてみれば今まで抱き続けて来たチャボ卵と引かえにいたたくわけである。私はこの忠実な母鳥にちよつと同情した。そこで、チャボ卵五卵のうち三卵を残して、雷鳥卵二卵と計五卵を混合抱卵させることにした。そうでもしなくてはきつとストライキをやられると思った。

雷鳥の卵をそつと母親の腹下へ押し込み、引替えのチャボ卵を抜き取って母親の態度を観察した。はじめ彼女は茶褐色のまだらのある雷鳥の卵をいぶかし気に眺めていたが、やがて口ばしで腹下の中央へかき入れて抱き始めた。それから三日して、ナゴヤは雷鳥の無精卵一卵だけを巣からかき出してしまった。やはり、命のない卵はちゃんとわかるのである。そのことを確認した私は無精卵を取り除いた。

翌日、ナゴヤの腹下ではチャボ卵三ヶが何れもコユツと打殺を始めた。仕方なし私は母親の腹下からチャボ卵を取り上げ孵卵機へ移した。ネゴヤは残された雷鳥の卵たった一

ケを抱き続けた。そうして、その翌々日の朝までかゝってどうにか雷鳥の雛を護生させた。育たなかつた雷鳥

生れ出たヒヨコはナゴヤにとっては全く意外だったかも知れない。兎に角、この足先まで毛の生えた野性あふるるばかりの雛をナゴヤは育てはじめた。雛は親の腹下から出て小屋の中を歩きまわり、しばらくして親の胸元へもぐる。親はこれを口ばしで上手に腹下へおし込んでやる。雛はやがてヒエの身生えや青菜の細切りをついばむ。母鳥はニワトリのヒヨコを育てると同じ流儀でトウモロコシのかみくだきなどを作って雛を呼ぶ。だが、どういいうわけか雷鳥の雛は母鳥の与える餌にとびつかない。それどころか母鳥の頭まではい上ってトサカに喰いつくのである。生きた虫とまぢがえているのだろうか? それでもナゴヤは叱らない。青菜の細切りを口にくわえコユツと呼びながらゆさぶる。雛も青菜なら喜んで喰う。育雛三日目に飼育舎から出して、庭を散歩させた。雛はアリゴを追ってどんどんとキウリのやぶや火の高い草むらの中へも入って行く。ナゴヤはこれ追ってついて歩くのだが、せま苦しいやぶの中は苦手だ。へトへトに疲れてしまったようだ。小屋へ戻してやると盛んに雛を羽根の下へ入れて抱こうとする。しかし、雛はあまり羽根の下を好まない。多少イライラして来たナゴヤは雛の頭を口ばしで軽くこすいて自分の腹下へかき入れた。

翌朝、雷鳥の雛はナゴヤの腹下で死んでいった。ナゴヤは時々、雛の頭を軽くつついてみたり、からだを足で起してみたりしながら、全く反応のない死体を何時までも抱き続けていた。

(山博主事)

落椿に苦しむ  
 高校時代の国語の時間に、椿をうたった芭蕉の句が出てきたことを覚えていて。その句はたしか  
 「うぐいすの  
 笠おとしたる椿かな」  
 といった句であったように記憶する。この時、国語の先生は関連した句として次の俳句も紹介した。

「落ちざまに  
 水こほしけり花椿」

当時、私は椿といえば写真や絵で知る以外は、坪庭に植えられた高さ50cm位の一株の栽培椿についての知識しかなかった。

坪庭の椿は冬になると保温と雪よけを兼ねたわらずとに包まれて雪の間から濃い緑色でかか光った楕円形の葉をのぞかせていた。そして、四月頃には2cm位の緑の玉をほころばせて紅色の八重の花弁を二つ三つくっつけた。この貧弱な知識では芭蕉の句にうたい込まれた情景がどうもしっくり理解できずその場では先生の説明だけを聞き流してしまったことを覚えている。

後になってわかったのであるが、俳句では椿は梅や桜につぐ重要な季節となり、多くの俳人によってすばらしい句が残されている。そして、句にうたわれた椿は、八重咲きの園芸品種よりむしろヤブツバキといわれる野生の椿が主であることがわかった。  
 深緑の葉陰からのそく紅の花は、ちょっと見では花弁の一枚一枚が離れているように見える。しかし、それぞれの花弁はそのつけ根で

## 雪国のツバキ 平林国男

相互に結び合わされ、その花冠のひとかたまりは風の無い日でも離しべを残したままぼりと抜け落ちる。また椿は密を吸いにきた小鳥によって花粉が媒介される。鳥媒花であるため、小鳥とは深い相互関係で結ばれている。山道の通りすがりに見かけた落花の風情が俳人の心をとらえたのであろう。

### つばきの無い里

ところで、黒潮に洗われる太平洋岸のほか日本海岸の多雪地方でも椿の自生が知られている。この椿は太平洋側のヤブツバキのちよつとした変りもの程度に考えられていたところ。昭和22年になって本田正次博士によってヤブツバキとは明らかに異なった別種であるとして紹介された。この椿には本田博士の調べ歩かれた陸中巖山の地名をとってサルイワツバキ、あるいはユキツバキと名命されている。

ユキツバキは鳥取、福井、石川、富山、新潟、山形、秋田、岩手など日本海岸沿いの雪深い山地に自生し、雪融けを追うように五月の末頃から開花する。

高さ1~2m

の灌木状になった幹は、いすれも地上や、地表に接する浅い表面を匍うようにして何回も分枝し、そのまま斜上して椿のやぶを作っている。深い雪の重みで地面近く押しつけられていた枝は融雪が進んで雪の圧力が少なくなるとガサツ、ガサツと重たい雪をはらい落す



(山博学芸員)

ように雪面からはね上る。枝のしなやかさに加えて雪の圧力への抵抗力は驚くほど強い。植物の分布を裏日本と表日本にわけて考える見方があるが、日本を裏と表で対比するとそれぞれ特徴のある種類が見出されて面白い。ユキツバキはさしずめ裏日本のチャンピオンと云いたいところであり、その形態や生活の営みすべてが裏日本の環境条件に適應している。

ところで信州はこのユキツバキにも縁がうすい。北信の県境近くのごく一部分すなわち大糸線の通る姫川沿いや信越線の荒川沿い、あるいは飯山線の信濃川沿いを深い雪を求めて侵入し生育している。

一方、太平洋のヤブツバキは信州の南国といわれる南信の県境の地方だけに分布する。これは中央西線の木曾川沿いと飯田線の天竜川沿いに温暖な気候を求めて侵入したものである。

とにかく信州の大部分は椿の自生が見られない地帯であり、椿の無い里に住む私は芭蕉や蕪村の落椿の心を理解するために思わぬ道草をくってしまった。

## 雪を詩う虫

倉田稔

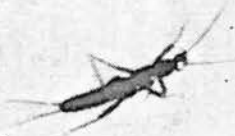
二月もなかはすぎると、よく晴れた寒い朝など、川べりのこおりついた雪の上に、裏山い10cmほどの虫がゴマをまいたように、散らばっているのを見かけることがある。

死んでいるのかと、さわってみると、あわてて雪粒のすき間へ逃げこんでしまう。寒いうちは静止しているが、陽が昇ると活発に動きまわる。

雪の上にいるのは親で、この頃が羽化最盛期なのだ。彼等は雪の上でむける。幼虫は溪流中にいるから、山あいの川辺には多い。何匹も一語にしておくと共喰いをするので、観察するには別々の容器に入れなければならない。

夏山の雪渓や、春の山ではいたるところに翅のない仲間がいる。これはセツケイカワゲラ(別名セツケイムシ)とよばれ、やはりクロカワゲラの仲間である。

雪の上はこの虫を見つけると、春が近いことを知るのである。(大町第一中学教諭)



針の木岳の頂上に立ち、黒部峡谷を隔てて指呼の間に濃紺の山肌を見てそびえる立山の姿に接したとき、立山は招きそしてきびしく拒絶するといった矛盾する不思議な感じにうたれたといった山男があった。この感懐はもつともなことで、立山は古くから霊山として崇められており、延喜式の中にも山頂に雄山神社を祀っていたと書かれていることからうなすかれる。この山が、仏教の影響をうけて神仏習合の修験者の霊場とされるようになったのは、越中の人佐伯有頼が立山々麓に普くら寺を建立したことにはじまるとされ、以来立山信仰は非常な勢いで広まってい

た。この立山は、信州側とは後立山連峯の重畳する山なみによって隔てられており、従って立山信仰の信州への伝播は一考考えられないところであるが昔の人の信仰心の強さはこの障害をのりこえて盛んに行なわれたという史料が富山県石動(いするぎ)町で発見され、彼の地の郷土史家橋本芳雄氏によって紹介されている。この町の観音寺の前庭に安置されている六尺余の青銅製の大地蔵尊像がこれである。そして像の台座の連弁には「信州松本町立山講中」と大きく彫られ、また体中いたるところに千人を超える信者名が村名とともに刻まれており、さらに左のごとき注目すべき銘も見えるというのである。

千時 文政八年乙酉七月吉祥日  
願主 教蔵坊照界立之  
請負 松本飯田町  
葉籠屋 佐原市石工門尉正孝  
世 信州安曇郡飯田村  
話 飯田喜代太郎(三名略)  
人 同国松本城下

### 松本平の立山講

#### 幅 具 義

本町松屋庄七(三名略)  
銘文中の教蔵坊は立山普くら寺の宿坊でありこの地蔵像はもと教蔵坊に安置されていたものであるが、明治の神仏分離の際に転々とし現在の地に遷座されたという。造像については、今を去る一四〇年の昔安曇郡にわたって立てられていた立山講の信者が、教蔵坊から出張して来る社人から祈禱札・守り札・霊薬などを受け、かわりに浄財を教蔵坊に奉加し、それによって松本町の鋳物師佐原市右衛門に請け負わせて鋳造させたものであることが判明する。

これをさらに裏付ける史料が松川村平林武夫氏(現大町二中校長)の所蔵文書中から発見された。これは時も同じ文政八年に、立山中宮教蔵坊の社人が平林氏の祖細野村平林徳左衛門に宛てて差し出した「営鑄地蔵尊支証」(別名「金像地蔵尊施財稟」)である。当時平林氏が身内の物故者四人の追善供養を教蔵坊に依頼するについては、地蔵尊營鑄の立願を企てた教蔵坊に宛てて浄財を奉加しこれを受領したということが、木版刷と重写を交えたこの証文によって明瞭となる。この様にして松本平の信者よりの施財はかなりの額に達し、ここに地蔵像の造立を見たものである。

なお平林氏文書には、右の史料より三十五年ほど溯る寛政元年にも立山教蔵坊の観音・地蔵二尊像營鑄立願に対して施財した証文が保存されており、この時の観音・地蔵二像も今なお立山に近いすれかの地に安置されているであろうが、その確認は将来の調査に俟つものである。

(松川小学校教諭)

### ノ ス リ 長 沢 修 介

2月に入り立春が過ぎてから毎日のように雪が降り、春がなお遠くへ行ってしまう感じである。

今冬はどうしたことか冬鳥の姿が目立って少ない。例年なら11月頃から沢山のツグミやカシラダカなどを見かけるのにツグミなどほとんど見かけず例年の半数も渡来しないのではないかと思われる。又、雪が降るとキレンジャクやヒレンジャクの群が取り残された庭の柿の実などを食べにやってくるのに今年はまだ一度もその姿を見ない。白一色の山野を歩いて見ても小鳥達の数は少なく、ノスリがただ一羽、淋しそうに樺杭に止っている姿は孤独で印象的だった。

### 博物館 ニ ュ ー ス

ライチョウの生活 発行

今年の五月、長野県で聞かれる全国緑化大会に両陛下が県下を訪れる。

これを機会に、ライチョウの生態写真を主にした単行本を作って両陛下におあげすることになった。

県知事、県教委、大町市、信毎書籍などで話しあった結果、県理科振興会で発行することにきまつたもので、四月二十日頃発刊の予定

#### 山博に焼却炉

ここ数年、館外の紙屑の処理に悩まされてきたが、大町の〆街を美しくしよう会(会長 渡辺敏さん)が寄付してくれた五千円を基に杉山千春、下島栄治、近藤賢治、伊藤東海、各氏の協力をいただき焼却炉を造ることにした。工事は二月の追加予算の通過を待って着工する。

#### 表 紙 説 明

鹿島槍国際スキー場より

鹿 島 槍 岳  
撮影 高橋 秀男

山と博物館 第九巻 第二号

発行所 一九六四年二月二十五日発行  
長野県大町市TEL(大町)二二一  
大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場

